

目的 湿潤布のすべり抵抗については、鈴木、大平氏等の報告(織学誌29-2)があるが、物理量と官能試験値との対応を検討し着心地解明の一端とする。

方法 湿潤布のすべり抵抗は、鈴木氏等の方法に準じて、ストレインゲージで検出する。(ゲージ容量300g, すべり速度0.5cm/min, 試料3.5×8.5cm)すなわち、接触棒にとりつけ、可動台の上に自然に接触させた試料に、試料のほぼ最大吸水量を、リビュールから滴下し吸水させた後、可動台を間歇的に動かして試料をすべらせる。その後抵抗がなくなったときの試料の重量と経過時間から、各吸水率時における、連続的な場合のすべり抵抗を知る。別に、官能試験の条件と合わせるため、約10%ごとの吸水率における抵抗も検出した。官能量は、女子学生5人による一対比較法(中屋義法)によって求めた。条件は、(1)同一試料について異なる吸水率。(2)同一水量について各試料。とした。試料は、番手と素材の異なるブロード6種(綿100%の100, 80, 60, 40番と、ポリエステル65%混紡の60, 40番)を用いた。(官能検査は、このうち80番と混紡60番を除いた4種)

結果 物理量のうち、連続抵抗の結果は報告と同じく、1)吸水率に対して極大値をもつ。2)素材効果の差がある。3)布構成の差がある。また吸水率ごとの抵抗曲線は、連続の場合より低く、その差にも素材、布構成の差がみられる。

官能量と物理量の対応は、(1)の同一試料一異吸水率では対応が認められた。(2)の同一水量については、同一素材ではかなり対応したが、素材の異なる40番手については、対応がみられなかった。